2023.10　熊日学童　５年男リレー優勝

優勝旗

2023.11　太郎丸・次郎丸ハイキング

2023.12　倉岳えびすマラソン

2024.1　天草市民駅伝

2024.3　七郎山ハイキング

濱悠季菜　中学

岡村太陽　中学

濱悠季菜　高校

岡村太陽　高校

岡村空　高校

近野雅斗　高校

山下貴文　新和ロードレース

村上さき　新和ロードレース

大中彰太郎　全国高校駅伝（都大路）３区

大中亮矢　箱根駅伝６区

大中彰太郎　大学　日体大記録会

- 55 大中祐平・岡村太陽　倉岳ペアマラソン

2021.3 お別れ会リレーマラソン

リレーマラソン

2022.1　倉岳えびすマラソン

2023.12　森涼吾　えびすマラソン　　2024.1　天草市民駅伝

2024.3　獅子島ハイキング56(七郎山)

～特 別 編～

全国への道　　**コーチ 濱いち子**

小学生陸上で全国へつながる大会は唯一、日清カップである(県予選で 5 年以上の優勝者のみ出場権が与えられる）。二女の悠季菜が 6 年生だった時､80m ハードルでの全国大会出場を目指し、家の庭付近で手作りのパイプハードルを使って毎日夕方練習した。力を出し切ったが強すぎたライバルに負け 2 位、当時の夢は叶わなかった。この頃より私の日清カップ全国への思いは始まっていた。

それから 9 年後、熊日学童五輪で４年生リレーが男女アベック優勝という快挙を成し遂げた。２年後の日清カップ混合リレーで全国へ行ける、そう頭の中をよぎった。

翌年の日清県予選においては 6 年嶋尾が全国を目指しハードル･高跳びの混成競技に挑戦した。器用な選手であり短い期間で上手く仕上げる事ができた。惜しくも優勝には届かず 2 位であったが見事な戦いぶりであった。悠季菜の時と同じ、相手が強すぎた。5 年 100m の本崎、田中も 2･3 位と健闘、来年こそは混合リレーで優勝し全国出場を叶えたいと夢を翌年に預けた。その年熊日学童五輪 5 年男子リレーは見事に連覇達成、順調に伸びている。しかし女子は 4 位まで順位を落としてしまう。練習を見ていても男子に比べると全国への欲が無さそう。

さあ 6 年生に上がって女子には「頑張れば全国へ行ける力があるんだから目指して行こうよ」と何度も言葉をかける。モチベーションもだいぶ上がり気合いが入って来た様子。タイムも伸びてネクストにも加入、本腰入れて全国を狙える環境も整った。練習では実際に 100m を走ってきてバトンを渡す練習を多く取り入れた。中学生にも 2×200m あるいは 4×100m リレーを小学生チームの横で走ってもらい本番さながらのレースをさせる。バトン技術と走力アップ、大会でもきちんとバトンを確実に渡せる自信をつける為の練習方法であった。小中学生とも相乗効果ある練習ができていた。練習を積み重ねるうちにメンバーの方からも「監督・コーチ達を東京（全国）に連れて行く!」と言ってくれるようになった。

6 月の県予選一週間前、クラブ合同記録会において好タイムがでた。バトンもまずまず。このまま良い雰囲気で挑むはずであったが、アンカー田中が足の不調を訴えてきた。リレーで優勝できなかった場合にと個人種目での優勝も狙い、昨年からこの大会の為にハードルや高跳び練習も取り組んできた。その影響も少しはあったであろう。本番までまともな練習ができない。リレー練習はバトンをもらったらそれで終わり、

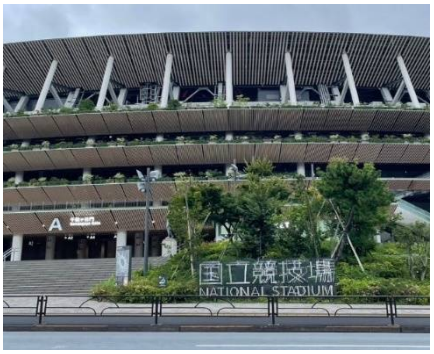
それくらいしか走れなかった。

本番 2 日前の最後の練習では「今の状態でやれるだけの事はやってきたのだから、負けない気持ちで行けば絶対大丈夫。明後日は勝ちに行こう！」そうメンバーに話した。普段は「昨日の自分に勝つ」と言う指導方針でやっているものの、あの日だけは(ライバルに)「勝ちに行こう！」と言った。小学生には難しい言葉かけだったのかもしれない。だがこのメンバーならライバルに絶対負けないで勝つという気持ちをプラスに変えられる、そんな思いを込めて話した。

大会当日 田中は朝のアップ時にギリギリまで悩んだが、本人とお父さんと話し合い個人種目欠場を決断、リレーにかける事にした。そのような中で予選決勝までオーダーは変えず 1 走岸上・2 走本崎・3 走柴田・アンカー田中の布陣で挑んだ。故障者を起用するというのは指導者にも重圧はかかる。決勝前の最終アップでも田中本人から不安そうに「走れるかなぁ～」と言葉が発っせられていた。田中の事が心配で決勝レース私は１人第４コーナー(アンカーのスタート位置)から見守っていた。ライバルはアスリートワーク。いよいよスタート。岸上、外側レーンからスタートのアスリートワークとの差を最小限にして踏ん張り、本崎へバトンを継ぐ。絶好調キャプテンは、期待どおり前の選手をどんどん抜きさり、トップとほぼ同時の 2 位で継ぐ。柴田、自分より持ちタイムの速いライバルと並走し最後まで粘り先にアンカーへ。田中、痛みをこらえながら力走し、そのままトップでゴール。悲願の全国大会初出場決定の瞬間、クラブ応援席で歓喜の声が飛び交う。私も１人喜びを噛み締めた後、すぐにクラブの応援席へと走った。レース後は沢山の方々から労いの言葉を頂いた。クラブ員皆が頑張ってくれたおかげで指導者としての全国大会出場の目標も叶えられ嬉しい限りであった。

全国大会までは 3 ヶ月あるが、その後県予選が終わってからは田中以外にも故障者続出。しばらく皆でまともに練習できず。バトン練習もタッチ程度の練習で全力で走って渡す練習ができない。県予選まで頑張り過ぎたんだから良い休養として考えて無理はしなかった。全国大会 1 ヶ月前となった日に気持ちを切り替える為ミーティングを行う。そこで横断幕の左上の文字に秘めた思いを説明する。「祝」ではなくて「祈健闘」と記している意味。気持ちを切り替え練習を追い込んで行く。ランキングも上位につけており更なる緊張感が高まる。

9 月全国大会本戦、今年は東京国立競技場。ここまで全国を目標に頑張り、そこで走れた事は貴重な経験となったであろう。我がクラブは決して速い子だけを育てるのではない。これは努力してきた結果がここにつながったのである。指導者陣にとっても大きな財産を与えてくれた。全国大会へ連れて来てくれてありがとう。さあまた次への挑戦だ！



今年は創立 25 周年目の記念の年。この歴史の中でほんの一部にしか過ぎないだろうが、これまで全国を目指し、たどり着くまでの奮戦記、ともに努力してきた道の証を残して置きたくここに綴る。